

連載6 「頭ごなしに怒らないで！」

A男さんは、納豆を食べると必ず下痢をした。もちろん最初は、納豆と下痢との関係に気がつくことができなかつたから、下痢をした時には、「下痢止めを服用して、脂っこいものを避けて…」というような常識的な処置が対応方法だった。が、下痢が重なるにつれて、誰かが「納豆を食べると下痢になること」に気がついた。

もちろん、知的障がいがある本人には言語的な説明能力が乏しいので、下痢という現象で、心の苦しさを伝えようとしているA男さんを助けるために、「一体それがいつからなのか？」がまず研究対象になった。調べると1ヶ月ほど前の実家への帰省の後に下痢が続いていることが明らかになった。

情報収集のために母親に電話をする。答えはすぐに分かった。

宮下：「お母さん、ちょっと教えて頂きたいんですけど、この間の帰省で、納豆と言われて何か思い出すことありますか？」

母親：「納豆？そうそう、こんなことありました。私がちょっと目を離したときに、冷蔵庫から納豆を出して食べようとしていたんですよ。ご飯食べたばかりだし、A男は糖尿もあるし、肝臓も悪いので、食べ過ぎちゃいけないと思って、ちょっと強く叱ったんですよ。分かってくれてすぐに止めてくれましたが…」

宮下：「そうですか。どうもその後に学園で納豆を食べると下痢をするようになっていたんですよ。納豆は、大好きなA男さんなんですけど、納豆を食べるとお母さんに怒られたことをきっと思い出すんですね。悪いことをしているって思っちゃうんだと思います。お母さんには、そんなつもりがなかったと思いますが、ちょっとお母さんのこと怖いと思ったのかもしれない。」

母親：「そうですか。私が見ていないと、何回言っても冷蔵庫から食べ物を出して食べるので、つい大きな声が出ちゃうんですよ。」

宮下：「お母さんのお気持ちはよくわかります。でもA男さんには、糖尿病のことも肝炎のことも、食事制限のことも、完全には理解できないので、なんだかよくわからないまま、<お母さんに怒られた>ということだけが、心に刻まれてしまったのではないかと思います。お母さんを怒らせるような悪いことをしてしまった自分は、もうお家には帰れないかもしれないくらいのことを感じているのかもしれない。」

そこで、お母さんをお願いなのですが、なぜお母さんが冷蔵庫から納豆を出して食べた時に怒ったのか、については十分私たちがA男さんに説明しますので、お母さんには、よく病気のことを説明しないで頭ごなしに怒ってしまったことを謝って頂いて、学園でこれからも納豆を食べていいことを伝えて頂いてもよろしいでしょうか？」

母親：「わかりました。ちょっと私も怒ってしまったこと気にしていたんですよ。」

この後、電話に出たK男さんは、母親の謝罪と納豆を食べることの承認を得て、安心の表情になった。もちろん、その後、納豆を食べた後の下痢はない。

十分に自分の置かれた状況や気持ちを言語的に説明することができない知的障がいの方々には度々このようなことが起こる。身体症状が言葉の代わりといってもいいのかもしれない。この場合、下痢は「お母さん怖かったんだ」の言葉の代わりだったんだろう。

そして、それを自分に置き換えて考えてみる。人は誰でも何才になっても訳も分からなく怒られるのはイヤだよ、という真実に考えが至る。別にそれはK男さんだけのことじゃないんだよねと。

育児でも保育でも支援でも、そして会社の部下指導においても、上手な叱り方、一生の課題である。